

続・ 珈琲の思い出 27

鈴木優子

優子の髪からえも言われぬいい香りが立ち上り、アルコールの酔いも手伝って、和樹はもう次第に我慢ができなくなってきた。

同じように実は優子の方も和樹の体温の温かさを感じながらも憧れの人とこんなに密着していることに幸せを感じていた。

「優子さん、お酒もう少し何か飲みませんか？」

優子があつとして、体を離れた。

「ごめんなさい、私ってば・・・凶々しく」

「いえいえ、いいんですよ。むしろ嬉しい、なんつって。」

「あの・・・私、もうそろそろ家に帰らなくてはいけないんです。でももう一杯だけ飲みましょう。」

そう言つて、優子は梅酒のソーダ割りを、和樹は芋焼酎のロックをオーダーして飲んだ。

「さ、それじゃ、行きましょうか？」

和樹は素早く二人分の会計を済ませると、

優子が席を立つて、入り口でパンプスを履くのを
見守っていた。

「えーと、優子さん、ご自宅はどのあたりなんですか？」

「私はK町です。」

「それなら、タクシー？」

「はい。」

「じゃあ、この辺はタクシーは通らないから、
大通りのタクシー乗り場まで僕お送りしますよ。」

「えっ!?ありがとうございます。」(続く)